

# 目 次

## カラー口絵

考古資料調査報告より	……………	1
------------	-------	---

## 考古資料調査報告

### 目録

木村定三コレクション日本考古目録		
吉田 広・原田 幹・原田 昌浩・大西 遼……………		11
木村定三コレクション中東考古目録		
中野 智章……………		23
木村定三コレクション中南米考古目録		
杓谷 茂樹……………		29
木村定三コレクション中国・朝鮮考古目録		
山本 堯・大西 遼……………		39

### 論文

木村定三コレクションの中国古玉		
山本 堯……………		53

## 木村定三コレクション銅釧・環鈴・鈴について

### 目録

木村定三コレクション銅釧・環鈴・鈴目録		
金 宇大……………		73

## 木村定三コレクションについて

木村美保子夫人の思い出——愛知県美術館を去るにあたり——		
古田 浩俊……………		81
木村定三の文体		
石崎 尚……………		87
木村定三著作集補遺		
(編)石崎 尚…		001(95)

# 木村定三コレクション銅釧・環鈴・鈴目録

## 凡例

- ・本目録は、愛知県美術館に寄贈された木村定三コレクションのうち、弥生～古墳時代の銅釧および鈴釧、環鈴、その他の鈴を紹介するものである。
- ・収納箱に木村定三氏がつけたとみられる名称が記されているものもあるが、本目録への掲載に際し、現在の分類における一般的な名称に改めた。
- ・記載内容は、コレクション番号、資料名称、法量、重量、調査・検討所見、実測図からなる。
- ・本目録の作成に際しては、京都府立大学の諫早直人氏、宮内庁書陵部の土屋隆史氏に資料の類例に関するご教示をいただいた。記して謝意を表する。

# 1 M1030 鈴釧

全長8.5cm 釧部外径7.0cm 釧部内径5.9cm 釧部幅0.5~0.6cm 釧部厚0.4cm

鈴部径1.3~1.4cm 鈴部高1.2~1.3cm

33g

古墳時代中期後半（5世紀後葉）

ほぼ正円形の釧本体に小さな鈴が五つ付随した、銅製の鈴釧である。鈴の一つにやや欠損があることを除き、ほぼ完形品である。釧本体は、上下面に加え内外側面にも稜をもち、断面菱形を呈する。鈴は直径が高さより若干大きいものの、その断面形状はほぼ正円状を呈する。五つの鈴のうち、上述の一部欠損のある鈴以外の四つには丸が遺存している。丸はいずれも小石である。

鈴釧は大きく分けて、釧本体が正円形に近いものと、オオツタノハ製貝輪を模したとみられる形状のものがあり、加藤一郎はそれぞれ「円環系」、「貝輪系」に分類している。本例は前者の「円環系鈴釧」の中でも、釧本体の「断面の四箇所に稜が見られ」、鈴の断面形状が「ほぼ正円形」の「A ii 型式」に該当する（加藤2021）。鈴釧は、一部の例外的資料を除き、古墳時代中期後半の限られた時期（5世紀後葉～末）に集中的に製作されるが、上述の型式はそれらを3段階に編年したうちの「第Ⅱ段階」に属する。

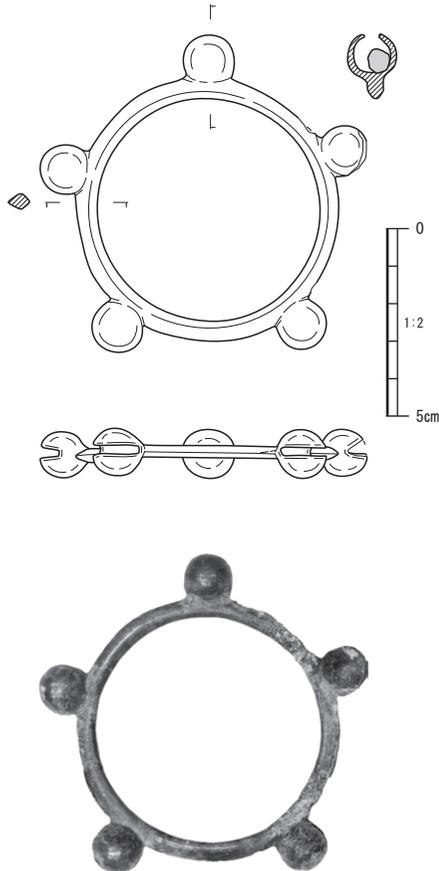
本資料を保管している木箱の蓋裏には、「信濃國下伊那郡 別府村三十番地 吉澤常松扣 字番神塚ヨリ掘トル 明治六年春也」との貼紙がある。「番神塚」とは、長野県飯田市にかつて存在した前方後円墳の番神塚古墳を指すとみられる。ここからは直刀や馬具、玉類のほか七鈴鏡（または五鈴鏡）が出土したとの記録があるが現物は行方不明となっている（長野県1981、国立歴史民俗博物館1994）。本例と何らかの関係がある可能性があるが、定かではない。

## 参考文献

加藤一郎2021『鈴釧の研究』『倭王権の考古学 古墳出土品にみる社会変化』早稲田大学出版部 pp.199-217

国立歴史民俗博物館1994『共同研究 日本出土鏡データ集成2 弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』国立歴史民俗博物館研究報告 第56集

長野県1981『長野県史』考古資料編（1）遺跡地名表 長野県史刊行会



## 2 M1031 鈴釧

全長10.4cm 釧部外径7.7cm 釧部内径6.4cm 釧部幅0.6~0.7cm 釧部厚0.6cm

鈴部径1.5~1.6cm 鈴部高1.5~1.7cm

89g

古墳時代中期後半（5世紀後葉）

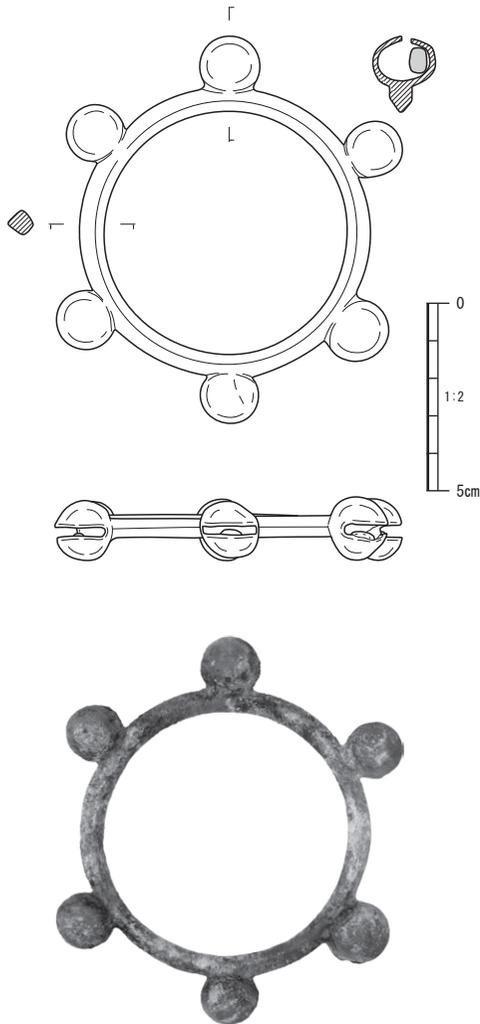
おおむね正円を呈する釧本体に六つの小鈴が取り付けいた銅製鈴釧である。M1030より若干大きい。鈴口に若干の欠けがみられるものの目立った欠損部のない優品である。釧本体は4面に稜を有し、断面菱形である。鈴は直径に対して高さがやや上回るが、おおむね断面正円形である。すべての鈴に丸が残っており、いずれも小石を使用している。

本例もM1030と同じく、加藤分類の「円環系」・「A ii 型式」に該当し、「第II段階」、5世紀後葉の年代が与えられる。資料の来歴は明らかでないが、鈴釧は古墳時代の中心エリアである近畿地方では出土例がなく、中四国～九州および東海・関東、特に後者に分布が集中することが知られる（大谷1999、加藤2021）。本例も日本列島内での出土品とみてよいだろう。

### 参考文献

加藤一郎2021「鈴釧の研究」『倭王権の考古学 古墳出土品にみる社会変化』早稲田大学出版部 pp.199-217

大谷宏治1999「鈴釧の集成」『石ノ形古墳』静岡県袋井市教育委員会 pp.151-157



### 3 M1031 銅釧

左：外径 7.1cm 内径 6.1cm 厚さ 0.4cm 高さ 0.4cm

右：外径 7.0cm 内径 6.0cm 厚さ 0.5cm 高さ 0.4cm

左：22g、右：20g

弥生時代中期

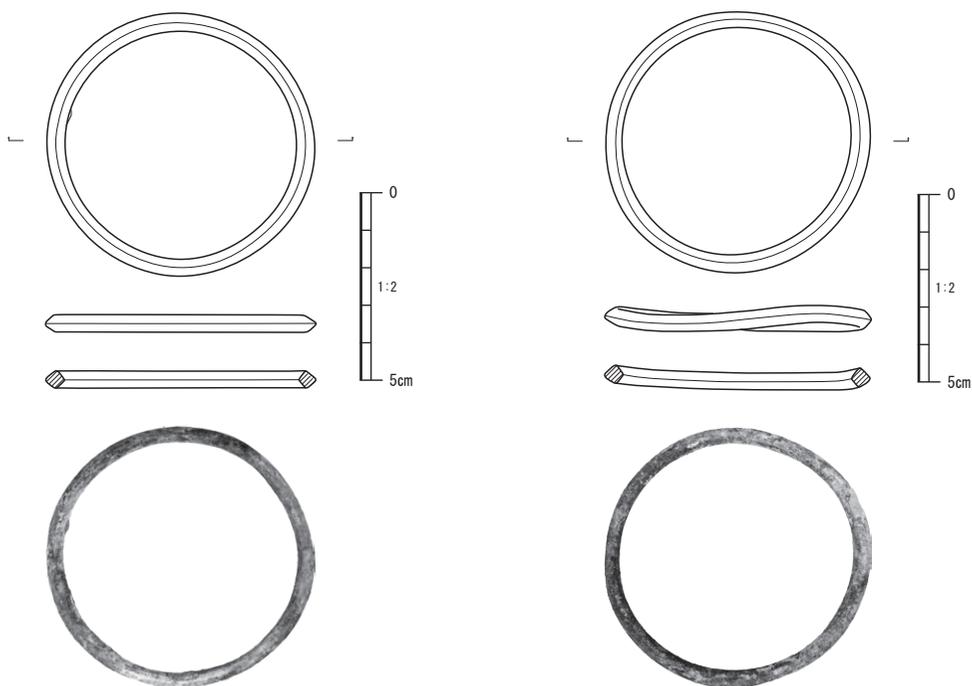
平面形が正円に近いシンプルな意匠の腕輪で、いわゆる「円環型銅釧」と呼ばれるものである。ほぼ同じ大きさの資料が2点あり、うち1点はやや歪んでいるが、いずれも完成品である。上下面および両側面に稜をもち、断面菱形を呈する。

円環型銅釧は、主に弥生時代後半期、九州北部を中心に近畿・中国地方に分布し、長野県や朝鮮半島でも出土が認められる(土屋・小松2010)。複数セットで出土することが多く、これらもセットで出土したものである可能性が高い。田尻義子による分類に照らすと、本例は「小型細身」、断面形が多角形を含む「不定形」で「2つの鑄型を合わせて鑄造した複合範」でつくられたと推定される「Ⅱ類」に該当し、弥生時代中期の年代が想定できる(田尻2018)。ただし、本例は径、厚さともにⅡ類の中ではやや大きな部類に属する。弥生時代後期になると大型太身のものへと変化することが指摘されており、相対的に新しい要素をもつものと解釈することもできる。

#### 参考文献

田尻義子2018「弥生時代北部九州における円環型銅釧の展開」『古文化談叢』第80集 九州古文化研究会 pp.69-86

土屋了介・小松謙2010「円環型銅釧の集成」『中原遺跡Ⅳ 11区・13区の弥生時代薨椁墓の調査—西九州自動車道建設に係る文化財調査法記憶書(7)—』佐賀県文化財調査報告書 第182集 pp.294-307



#### 4 M1032 環鈴

全長 8.9cm 鈴径 3.4~3.5cm 鈴高3.7~3.9cm

環部外径3.7cm 環部内径2.6cm 環幅 0.5cm 環厚 0.6~0.7cm

118g

古墳時代中期（5世紀）

円環の周囲に三つの鈴を等分に配した、銅製の三環鈴である。鈴口に欠けが認められるが、全体としてはほぼ完形に近い。鈴は、平面形は正円形ないしやや横長の楕円形であるが、側面では縦に長い楕円形を呈する。各鈴と環の接続部には、不明瞭ながらもわずかに脚（基部）と呼びうる部位が認められる。環は断面隅丸方形である。鈴の中には土が溜まっているが、鈴の一つで内部に丸の遺存が確認できる。丸は銅製の小鈴とみられる。その小鈴の内部にも丸らしき輪郭が見えるが、素材などは判然としない。

環鈴には、2鈴のものや4鈴のものもあるが、ごく少数であり、3鈴が通常の形態である。その用途については、多様な出土状況から、祭祀具や装身具である可能性も指摘されてきたが、基本的には馬具の一部であり、轡や引手あるいは手綱に垂下したものであったとの認識（杉本1991ほか）が通説となっている。石山勲は、鈴径が30mm前後の小型、45mm内外の中型、50mm以上の大型に分け、日本列島では時期が下るにしたがって次第に大きくなることを指摘している（石山1980ほか）。本例は上記分類での位置づけがやや難しいが、いずれかといえば小型に属するといえる。

一方、丸に小鈴を用いている点は注目に値する。日本列島出土例では、鉄丸を採用した福岡県稲堂21号墳例を除いて、いずれも石を使う（石山2005）。一方、中国大陸や朝鮮半島出土例では金属製の丸を用いるのが一般的であるが、小鈴を入れた環鈴は出土地が明らかな例では確認されておらず、出土地不明の東京国立博物館5297号（早乙女1984）が唯一である。通常の鈴であれば、京都大学総合博物館所蔵中国包頭市出土例や宮崎県持田24号墳出土例などがあるが、やはり非常に珍しい。金属製の丸であるという点を重視すれば、本例は日本列島出土品でなく朝鮮半島ないし中国大陸出土品の可能性が高いといえる。なお、上述の東京国立博物館5297号は形態や法量の面でも本例と比較的類似する。

保管されている木箱には、「奈良縣山邊郡拓殖野古墳発掘」との箱書きがある。

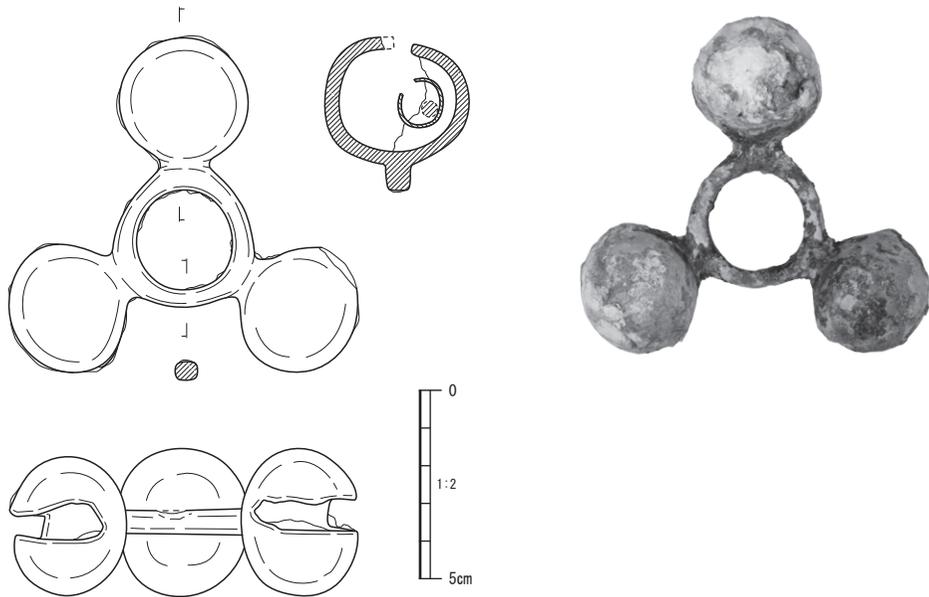
#### 参考文献

杉本宏1991「三環鈴」『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告書 第2冊 宇治市教育委員会 pp.142-146

石山勲1980「九州出土の環鈴について」『古代探叢—滝口宏先生古稀記念考古学論集—』早稲田大学出版部 pp.221-233

石山勲2005「環鈴に珍しい」『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書 第32集 行橋市教育委員会 pp.311-326

早乙女雅博1984「朝鮮半島出土の環鈴」『Museum』No.402 東京国立博物館 pp.24-34



## 5 M1033 銅鈴

鈴高 9.8cm 鈴胴部高 6.2cm 鈴胴部最大径 5.6cm  
鈕高 3.6cm 鈕軸部長 1.5cm 鈕軸部厚 0.5cm 鈕環部径 横2.4cm・縦2.1cm  
126g  
年代不明

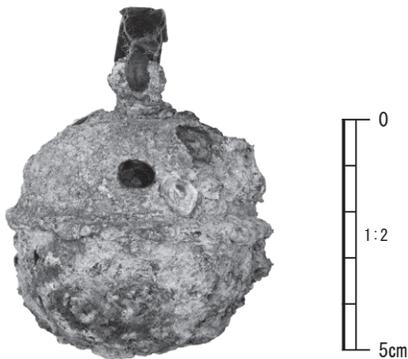
やや縦長の球形を呈する本体に軸部を介した環状鈕が付随する銅製の多孔鈴である。鈴本体にスイカの柄のような縦方向の透かしを10ヵ所、無作為に設ける。鈕の軸は断面杏仁形で、環状鈕はやや横長の楕円形を呈する。内部には鉄製の丸が二つ入っている。丸はそれぞれ径1.1cm・1.3cmである。



## 6 M1033 鉄鈴

鈴高 6.6cm 鈴胴部高 5.4cm 鈴胴部最大径 6.0cm  
鈕高 1.2cm 鈕環部径 1.2cm 鈕環部厚 0.5cm  
70g  
年代不明

隅丸方形に近い鈴本体に環状の鈕が付属する鉄製の鈴である。全体が錆に覆われており、鈴本体の稜の有無は判然としない。胴部中央には幅0.4cmの腹帯をめぐらせる。下部に細長い毛抜形の鈴口を設ける。内部には丸が認められるが、その素材等は明らかでない。



## 7 M1033 銅鈴

全高 6.1cm 鈴最大径（鏑部） 6.3cm 鈴胴部径（腰部） 3.9cm

鈴高 4.5cm 鈴胴部高 3.7cm 鈕高 0.8cm 鈕幅 0.6cm

遊環径 2.2cm 遊環厚 0.3cm

253g

年代不明

カンカン帽を上下に合わせたような形状の重厚な銅製鈴である。中央（鏑部）が大きく扁平に張り出しており、この張り出し部で2カ所に鉾を打ち上下の部材を固定する。鉾頭径は0.6cmで、鉾脚をかしめる。上部には垂下のための環状鈕が取り付け、大きめの遊環が連結されている。下部に細長い毛抜形の鈴口を設ける。内部には丸が入っているが、素材等は不明である。



愛知県美術館研究紀要 第31号 木村定三コレクション編

2025年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

The logo for AOMOA (Aichi Prefectural Museum of Art) features the lowercase letters 'aomoa' in a stylized, rounded font. Below the letters, the full name 'aichi prefectural museum of art' is written in a smaller, sans-serif font.

制作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.31

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2025

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.